

大学生のノート取り方略使用尺度の構成

○山根 嵩史¹・#魚崎 祐子²・田中 光¹・中條 和光¹

(¹ 広島大学大学院教育学研究科・² 玉川大学)

授業中のノートテイキングは、学習者の積極的な学習の指標とされ、また、ノート PC やタブレット端末が普及した昨今においても、コンピュータ上でノートを取るよりも、手書きでノートテイキングを行う方が学習に対して有効であるとする知見もある (Mueller & Oppenheimer, 2014)。したがって、授業場面でのノートテイキングは今日においても学習指導の中心的研究テーマである。

魚崎 (2014) は、大学生のノート取り方略について、方略の有効性認知および指導の有無との関連を検討している。また増田・西川・上村・岡邑 (2015) では、大学生と大学教員の両立場から、「よいノート」の要件について分析を行っている。そこで本研究では、これらの先行研究の知見をもとにノート取り行動のリストを作成し、探索的因子分析を用いて構造化された尺度を開発する。

方法

調査参加者 大学生 243 名 (男性 121 名, 女性 122 名, 平均年齢 20.37 歳, $SD = 0.10$) であった。

調査用紙 調査用紙は表紙, ノート取り行動の項目リストとフェイス項目で構成した。ノート取り方略は, 魚崎 (2014) において作成された 16 項目に, 増田他 (2015) を参考にして作成した 15 項目を加えた 31 項目であった。

手続き 調査は大学の授業終了後の時間を利用して実施された。調査内容の説明後, 調査票への回答をもって調査協力への同意と見なされることを説明した。参加者は, ノート取り方略の各項目について, 「どのくらいおこなっていますか」(使用) について 5 件法で回答した。

結果

ノート取り行動の各項目について, どれくらい行っているかに関する評定値を対象に最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量が .30 以下の項目を削除し, 21 項目に対する 5 因子解を採用した (Table 1)。

考察

本研究では, 大学生のノート取り方略の因子パターンを明らかにし, ノート取り方略尺度の構成を行った。その結果, “見やすさ”, “視覚的標識化”, “思考の外化”, “情報の精選”, “重要語句” の 5

Table 1 ノート取り方略の因子パターン

項目	I	II	III	IV	V	
見やすさ ($\alpha = .86$)						
丁寧に書く	0.84	-0.24	-0.04	-0.06	0.09	
色使いを工夫する	0.75	0.29	-0.21	-0.07	-0.05	
見やすい大きさの文字で書く	0.73	0.12	0.04	0.06	-0.09	
余白を十分にとる	0.67	0.19	0.02	0.07	-0.12	
レイアウトを工夫する	0.60	-0.04	0.02	-0.07	0.19	
復習をしやすく書く	0.46	-0.19	0.16	0.05	0.23	
視覚的標識化 ($\alpha = .72$)						
文字を囲む	0.02	0.62	-0.01	-0.05	-0.12	
下線を引く	-0.10	0.62	-0.14	0.12	0.09	
教科書のページ番号をメモする	-0.06	0.57	-0.01	-0.02	0.03	
文字を強調する	0.13	0.52	0.03	-0.14	0.03	
矢印を活用する	-0.06	0.35	0.12	-0.03	0.24	
印を活用する	0.04	0.33	0.24	0.04	0.12	
思考の外化 ($\alpha = .72$)						
自分の考えを書きこむ	-0.16	-0.06	0.84	-0.07	-0.02	
疑問に思ったことを書く	0.01	0.02	0.81	0.05	-0.12	
図表を活用する	0.14	0.23	0.39	0.11	-0.04	
情報の精選 ($\alpha = .68$)						
大切な情報を選んで書く	-0.06	-0.05	0.07	0.76	0.27	
文字数を少なくする	-0.04	0.16	-0.07	0.64	-0.09	
多くの量を書く	-0.05	0.19	0.07	0.61	0.11	
重要語句 ($\alpha = .61$)						
正しい内容を書く	0.01	-0.04	-0.07	0.03	0.68	
重要な語句を書く	0.03	0.12	-0.06	0.17	0.60	
黒板(スクリーン)に提示された情報を書く	-0.04	0.19	-0.09	-0.05	0.47	
因子間相関	I	—	0.43	0.41	0.04	0.53
	II		—	0.51	0.05	0.51
	III			—	0.10	0.41
	IV				—	-0.08
	V					—

因子が見出された。本尺度の信頼性や妥当性の検証が行われる必要があるが, この尺度を用いて, ノートテイキングの実態調査や指導法等の介入研究を行うことが今後の課題となるだろう。

引用文献

- 増田 将伸・西川 真理子・上村 健二・岡邑 衛 (2015). 大学生と大学教職員が考える「よいノート」の要件—「甲子園大学ノート大賞」でのコメントを基に— 大学教育研究ジャーナル, 12, 62-70.
- Mueller, P. A., & Oppenheimer, D. M. (2014). The pen is mightier than the keyboard advantages of longhand over laptop note taking. *Psychological science*, 25, 1-10.
- 魚崎 祐子 (2014). 大学生はどのようなノートをとろうとしているのか—有効性認知やこれまでに受けた指導との関係— 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集, 795.